

イチゴの新品種について②

～「てるのか」の特性と栽培上の問題点～

農林水産省野菜試験場久留米支場
育 種 第 2 研 究 室 長

本 多 藤 雄

II 「てるのか」の特性と栽培上の問題点

1. 「てるのか」の特性

「てるのか」は農林13号として、農林水産省野菜試験場久留米支場から昭和53年に発表された。「宝交早生」と「ダナー」の組合せによって育成され、果実の光沢が極めて優れ、ダナーに似た香りで、電照栽培で収量が多く得られるので、「照香」と名付けられた。

第1の大きな特徴は、極めて光沢に富む鮮紅色の大きな果実をつけ、果皮は強く、酸味は殆どないため、甘く感じ、「ダナー」の香がすることである。光沢はこれまで発表された品種中で、「てるのか」に匹敵するものはなく、恐らく最高と考えられる。

果実は鮮紅色であるが暗色化することはなく、蛍光灯の下では明るい色に見える。光を十分に受けることが大切で、株が繁茂しすぎるとやや着色がうすいことがある。果実の大きさは「はるのか」や「宝交早生」、「ダナー」に比べると大きいという評価であるが、株が小さく着果を多くしてわい化させるとくず果が多くなる。果実の糖度は「はるのか」に比べると劣り、「宝交早生」程度だが、酸味がほとんどないので、食べると甘く感じ、子供の好んで食べるうまさがある。冬は酸味より甘味を要求されるので、冬のイチゴとしては最高とされる。

甘味のみを要求する関西では「宝交早生」に代わる食味もっている。香りが「ダナー」と非常に似ていて、もぎ立てのイチゴらしい香りを持ち、関東の「ダナー」に代わる味をもつ。果皮が平滑なので光沢に優れるが、そう果（植物学でいう果実で、一般には種と呼ばれている。）のおち込みが少ないので、株疲れを起こしたり、乾燥させると、そう果が飛び出した状態になりやすい。

第2の特徴は、第1果房の花芽分化から第2果房の花芽の分化までの日数が短く、連続して花芽が形成される上に、出ら、開花、成熟までの日数が短く、早生種で促成栽培に適することである。

「宝交早生」や「はるのか」などは、第1果房（頂果房）の花芽分化から第2花芽の花芽分化まで約30日で、開花までは、開花日の早い「はるのか」が32日、開花の遅い「宝交早生」で35日かかるのに対して、「てるのか」の第1、第2果房の花芽分化の間隔が20日で、開花は、

第1果房の開花が「宝交早生」と同時期であるので、第2果房の開花まで25日である。出らから開花まで、開花から成熟までの日数は9日及び35日で、「はるのか」の10日、及び38日、「宝交早生」の11日及び34日に比べるとやや短く、7℃以上の有効積算温度も「はるのか」の380.5℃、「宝交早生」の349.5℃に比べ、327.5℃と低い温度で成熟に達している。

「てるのか」の花芽分化期は、「はるのか」の第1果房の分化期より約10日遅いが、第2果房は逆に10日早いので、全く同時期となり、収穫始は「はるのか」のほうがはるかに早い、第2果房の収穫はほぼ同期となる。

また第2果房と第3果房も15日と短く、連続して花芽が分化する。この第2果房、第3果房の花芽分化が開隔の短いことは、促成栽培のビニル被覆期や、電照栽培での電照開始日に大きく関係し、安定することになる。

すなわち促成栽培では、ビニル被覆が10月中下旬となるが、第1果房の花芽分化が9月中旬となる「はるのか」では、ほとんど問題はないが、9月下旬又は10月上旬に

第1表 早生性に関連する特性

品 種	頂次の果房数	出開ら花芽の期間	開成花から開成までの日数	開の有花7効か積算成上温の度
湯 姫	21日	8日	33日	326.5℃
てるのか	25	9	35	327.5
長崎クイン	30	11	31	306.3
はるのか	32	10	38	380.5
宝交早生	35	11	34	349.5
ダ ナ	35	9	40	381.0
麗 紅	39	11	47	442.5

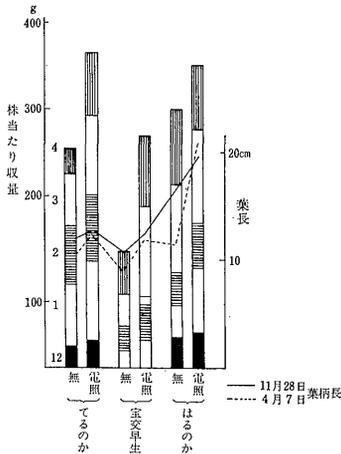
花芽分化する品種では、第2果房が30日後ではビニル被覆後となり、休眠のある品種では、ビニル被覆前にジベレリンを散布して、その後高温密閉してわい化を防ぐ。この高温密閉処理は、花芽分化を停止させる。したがって第2果房が分化せずに終わる。ところが第2果房の花芽分化が20日後であれば、ビニル被覆前に第2果房の花芽が分化することになり、連続して果房ができる。

第3の特長は、休眠が中位で電照栽培適応性が高い。「てるのか」の休眠は「宝交早生」よりは浅いので、促成栽培でも早くから収穫できるが、第2果房、第3果房と連続して果房が発生するため、2月に第3果房まで収穫した、最も休眠の深い時期には、わい化がひどくなり、果実のそう果が飛び出す。電照栽培は休眠の中～深い品種でわい化を防ぐために行われるが、休眠前から電照を開始する「宝交早生」程度の品種では、10月下旬から11月上旬に電照を開始する必要がある。

ところが「宝交早生」のように、第2果房が第1果房より30日後に分化する品種では、第2果房と電照開始期

が同じ時期であり、まだ休眠に入っていないので、電照によって第2果房の花芽分化が停止して、ランナーに変わることがあり、秋早く低温になる場合は比較的花芽分化が早く、第2果房まで分化して

図1 促成栽培における電照の効果



後に電照開始となるが、秋比較的高温の場合は、花芽分化が遅れて、第2果房が分化する前に電照を開始する破目になる。

しかし、第1果房と第2果房の間が20日である「てるのか」の場合は、秋高温で、第1果房の花芽分化が遅れた場合でも、10月25日ころまでには分化するので、第2果房は10月25日には分化することになる。「てるのか」は「宝交早生」よりやや休眠が浅いので、電照開始期は11月5～10日で十分である。したがって、それまでに第2果房は確実に分化する。更に「てるのか」は最低温度が12℃になると、休眠に突入するので、11月中旬からは間違いなく休眠に入ってくる。

イチゴは休眠に入った後は、電照による長日条件にすることによって、花芽分化はむしろ促進する傾向にあるので、電照開始後間もなく第3果房も分化し、以後次々に花芽ができてくる。「てるのか」の電照栽培で、最も注意しなければならないのは、ビニル被覆後必ず換気をして、25℃以上に絶対にしないことである。25℃以上にすると花芽分化が停止する。高温密閉という処理と、電照栽培とは、ともに葉柄を伸ばし、わい化を防ぐ処理であるので、電照では絶対にむし込みはしない。

第4の特長はうどんこ病抵抗性は極めて強く、また萎黄病にも強いことである。うどんこ病抵抗性は特性検定の結果でも、抵抗性は強いほうに属し、未だにうどんこ病の発生を

見ていない。また萎黄病も、特性検定場所では萎黄病を接種したほ場から採苗できたことされるように、かなり強く、「宝交早生」で枯死したところに植えても、発病しなかった事例は多い。しかし免疫性ではないので、発生は覚悟しておかねばならない。

2. 栽培上の留意点

「てるのか」は「宝交早生」に似ていて、ランナーの発生が少なく遅いので、必ず専用親株を利用することが望ましい。収穫した株からは、ほとんどランナーは発生しない。また、3月中旬以降ビニルトンネルを被覆し、下葉つみや花房を摘除するとランナーの発生は多い。促成栽培に用いる苗は7月上旬までに根を下ろした苗であるので、それまでに十分苗を出させておく必要がある。

促成栽培のためには、9月20～25日に確実に花芽を分化させる必要があり、そのためには、8月20日ころから窒素の吸収が少なくなるように、すばらしを行ったり、無肥料のところへ仮植をする。ポリマルチの上に無肥料の土を5～7cmおいてベッドを作り、これに仮植する方法が最もよい。定植まで窒素が切れない状態で育苗すると、奇形果がふえたり、株が繁茂し着色不良となりやすい。

電照しないときは、ジベレリン10ppmを10月中旬に散布し、その後11月中旬、12月中旬に5ppmを散布すればわい化は少ない。栽培の最大の問題は、株疲れを起こすと、そう果が飛び出して品質を落とすことであるから、株疲れしないよう電照栽培を行うか、常にかん水と追肥を行って株疲れを防ぐ必要がある。

「てるのか」の有利性は12月から2月、あるいは3月まで連続収穫することで、その後メロン、スイカ、キュウリ、ナスなど他の野菜類の半促成栽培と組み合わせられるので、今後「宝交早生」や「ダナー」に代わり他作物との組合せの栽培体系で増大すると考えられる。

表2 「てるのか」の促成電照栽培における適応性

試 験 地	年次	収穫始 月 日	早 期 取 量 ^a		全 取 量 ^a		適 応 性		
			株当たり 対 比	宝交早生 対 比	株当たり 対 比	宝交早生 対 比			
促 成 栽 培			g		g				
栃 木	1976	1.19	25	21	169	75	○		
千葉 暖地	76	12.24	98	118	357	70	◎		
"	77	12.16	152	164	344	99	☆		
静 岡	76	1.16	94	101	150	119	70	83	◎
"	77	1.24	66	66	184	142	55	80	◎
奈 良	76	12.26	258	—	112	454	—	114	×
鳥 取 西 伯	76	1.16	40	81	—	247	90	—	○
"	77	2.12	75	115	—	192	106	—	○
福 岡	76	1.15	103	256	269	294	80	102	◎
"	77	12.24	120	107	131	302	82	135	☆
熊 本 八 代	76	1.12	47	64	—	294	97	—	◎
"	77	12.15	82	71	—	287	86	—	◎
鹿 児 島	76	2.26	284	173	127	391	124	120	◎
"	77	2.13	127	163	132	295	105	143	◎
促 成 電 照 栽 培			g		g				
栃 木	77	1.14	203	179	—	270	117	—	×
新 潟	76	1.6	424	—	191	595	—	143	◎
"	77	1.10	262	—	150	662	—	113	☆
岐 阜	76	1.2	264	—	104	388	—	105	◎
奈 良	76	12.26	256	—	138	393	—	112	×
岡 山	76	12.27	259	—	186	388	—	170	☆

a 早期収量はいずれも2月末まで。 b 全収量は試験場所によって収穫切取り日は異なり、4月末又は5月末まで。
c 適応性の判定は、☆適及採用、◎有望、○再検討、×不適、栃木、奈良県の不適は後期収穫果の種子が突出するため。